

# 英語学習における 自尊感情と意欲喪失の関係

津村修志  
大阪商業大学  
Shuji Tsumura  
Osaka University of  
Commerce

## Relationship between self-esteem and demotivating factors in English learning

### Reference data:

Tsumura, S. (2011). Relationship between self-esteem and demotivating factors in English learning. In A. Stewart (Ed.), *JALT2010 Conference Proceedings*. Tokyo: JALT.

The purpose of this study is to identify the relationship between self-esteem and demotivation. Four hundred and fourteen university students were asked to respond to a few open-end questions including "What demotivated or discouraged you about learning English?" in addition to some multiple choice questions, and Rosenberg's Self-Esteem Scale. Various key words were extracted through a text mining analysis, and they, as well as the answers to the multiple choice questions, were analyzed with a correspondence analysis. Finally, students who used the key word, "Not able to understand" were isolated and cross-examined with the answers to the multiple choice questions. The findings showed that the students who disliked English and who did not think they were good at it did not necessarily have low self-esteem. On the other hand, the students who liked English and who thought they were fairly good at it showed relatively low self-esteem. It was considered that these results were influenced by the self-esteem defense mechanism.

本稿は、意欲喪失と自尊感情の関係探索を目的として、首都圏と関西の4年制大学4校に所属する414名の学生を対象に質問紙による調査を行った結果を報告するものである。質問紙には、自尊感情尺度、選択式質問項目の他、自由記述式項目も含め、自由記述式項目に対する回答は、テキストマイニングソフトで分析を行い、意欲喪失要因を示すキーワードを抽出した。対応分析によって作成される図上には、選択式質問項目の回答も布置され、キーワードとの関連が探索された。特に「分かる」というキーワードは、「分からないことが原因で意欲喪失が起こる」を意味し、そう回答した学生(74名)については、選択式質問項目に対する回答の比率の差を検定した。その結果、予想に反して、下位群の自尊感情は必ずしも低くはなく、また、上位群の自尊感情が比較的低いという結果となった。これは、「英語ができるから自尊感情が高い」、また「できないから低い」という単純な関係があるわけではなく、「自尊感情を防衛」しようという意識が結果に影響したものと考察する。

### はじめに

大学生の英語力低下が年々深刻になると同時に、英語の学習を嫌う学生も増えている。2009年、4年制大学生506名を対象にした質問紙調査(Tsumura, 2010)では、「英語学習が嫌い」と答えた学生が132名(26.1%)、「どちらかという嫌い」が215名(42.5%)であった。この二つの合計は68.6%で、英語を嫌う学生は3分の2を越えることになる。しかし初めて英語を習った時から英語の学習が嫌いであったわけではないはずだ。6年以上に及ぶ英語学習の過程で意欲を失い、その結果英語を嫌うようになったと考えられよう。ではなぜ意欲喪失が起こるのだろうか。



この原因を探る試みは、いくつかの先行研究に見ることができ。Dornyei (2001)の調査では、1) 教員の性格、献身度、能力、教え方、2) 不適切な学校設備や授業運営法(クラスサイズ、レベル、頻繁な教員の入れ替わりなどを含む)、3) 自信喪失(失敗した経験と、成功体験の不足)、4) 第2言語に対する否定的な態度、5) 第2言語学習が必修であること、6) 他の外国語学習の干渉、7) 第2言語社会に対する否定的な態度、8) クラスメイトの態度、9) 教科書、という9つの意欲喪失要因が見出され、中でも教員に関わるものももっとも影響が大きいとしている。他にもTrang & Baldauf (2007)、Muhonen (2004)、Ushioda (1998)の調査でも、教員に関わる要因が最大であったという。

他方、学習者を英語が好きだというグループと、嫌いだというグループに分けて見た場合、「嫌い」グループの意欲喪失要因は、「暗記量が多い」、「文法が難しい」、「授業が難しい」、「試験が難しい」、「学習方法が分からない」などが上位に来ており、外発的要因よりもむしろ「困難・能力の壁」を感じたときに意欲喪失が起こる場合が多いことが示された(津村、2010)。Tsumura (2010)では、自由記述式の回答に対してテキストマイニングソフトによるキーワード抽出・分析が行われたが、キーワードの中でも「分かる」が最上位に来ていた。これは、共起関係から「授業が分からない」、「文法が分からない」などを意味していることが明らかであったが、「教員の教え方が悪いために分からない」というような外的な要因に言及しているものが少なかったことから、英語「嫌い」グループの学習者の中には英語ができない原因を自分自身にあると考える者が多いと推測できる。

内的な要因が意欲喪失に影響しているのであれば、多くの学習者が「分からない」原因を自分自身の能力や努力不足にあるとし、そこからさらに自信喪失、自己否定へと発展させてしまっていると推測できる。つまり、「分からない」と感じている学習者の中には、意欲喪失と同時に自尊感情の低下を起こしている者もいると考えられる。

自尊感情について、Rosenberg (遠藤、1992に引用)では、「たとえ平均的な人間であったとしても自分が設定した価値基準に照らして自分を受容すること (self-acceptance) であり、自分に好意をいだき (self-liking)、自分を尊重すること (self-respect) 」(p. 62) であると説明されている。「自尊感情」が学業成績に大きな影響力を持っていることは、柏木 (1983) の「高校生の頃に高い自尊感情をもつことが、将来に対する高い要求水準をもたせ、それを達成するように促し、その結果、後により高い成功=高い教育水準が導かれたとみることができよう」(p. 96) という考察の中にも伺える。外国語学習においては、Heyde (1979) が、米国の大学で外国語としてフランス語を学ぶ学生について、自尊感情とoral production taskに対する評価の間に正の相関があることを示している。

自尊感情と学業成績が関連しているなら、自尊感情と学習意欲にも正の相関が有ると考えられる。Rubio (2007) は次のように、自尊感情の低さが外国語学習の大きな心理的障害となり得ることを示唆している。

...though in the context of language learning low self-esteem is a non-clinical phenomenon, it can have serious consequences. Students may avoid taking the necessary risks to acquire communicative competence in the target language; they may feel deeply insecure and even drop out of the class. (p. 7)

このことから「意欲喪失の程度が大きい学習者の自尊感情は低い」と言えるのではないだろうか。しかし、外国語としての英語学習に限定して見ると、この関連についての文献がほとんどなく、研究の余地が残されているようである。「意欲が下がれば自尊感情も低下する」のか、あるいは「自尊感情が低下すると意欲喪失が起こる」のかは本研究の範疇を超えるが、まずこの二つに何らかの関連があることを確認したい。

本調査は、自由記述の回答から、テキストマイニングソフトを使用して意欲喪失要因についてのキーワード抽出を行い、これらの要因と自尊感情尺度への回答を合わせて対応分析にかけることによって両者の関連を見ようとするものである。さらに、英語に対する好き・嫌い、英語力の自己評価、テストに対する不安、大学生としての自己評価などと意欲喪失要因との関連も探索することにした。

本調査の仮説は以下の通りである。

1. 英語を嫌う学生の中には自尊感情が低い学生が多い。
2. 英語ができないと思っている学生の中には自尊感情が低い学生が多い。
3. 英語力下位レベルの学生の中には自尊感情が低い学生が多い。

## 方法 調査時期と対象

2010年6月、首都圏と関西の4年制大学それぞれ2校(計4校)に質問紙による調査を依頼し、合計414名の協力を得た。調査は授業中約15分を割いてもらい実施した。首都圏の大学2校のうち1校は私立大学で男女比は9:1、全体の70%が1年生であった。もう1校は国立大学でやはり男女比9:1、こちらも全体の70%が1年生であった。いずれも非英語専攻の学生である。関西の2校は



どちらも私立大学で、うち1校は全員英語専攻の学生から成り男子27%、女子73%で、全体の87%が1年生であった。上記3校については、筆者の知人に調査の趣旨・方法を説明し、筆者に代わって調査を実施してもらった。残り1校は筆者の勤務先で、全員が非英語専攻、男子95%、女子5%で、全体の85%が1年生であった。2年生から4年生の学生が少数であったため、1年生のみを分析対象とする方がより均一なデータが得られたはずだが、テキストマイニング分析でキーワードを抽出するためには、1人でも多くの回答が必要となるので、全学年のデータを含めた。当初全データを用いて分析を始めても、出現頻度の低いキーワード(本調査では10回未満のもの)は分析に使用しないため、少数の回答が結果に大きな影響を与えることがないと推測できる。

本来標準テストなどにより学生のレベルを判定することが理想的であるが、筆者の勤務先の学生と他校の学生との差がかなり大きいと判断できたため、前者を下位群、後者を上位群とすることにした。この判断の根拠は、授業の内容、教材である。たとえば下位群の学生に対しては、中学1、2年生で習うようなことを授業で扱うことが多く、学生の中にはアルファベットも確実に覚えていない者がいる一方、上位群では、英語専攻の学生がいるのに加えて比較的難易度の高い教材(たとえば、Power-up English 上級編[南雲堂])が使用されていた。また、下位群の学生は全員、筆者の勤務先のクラス分けテストで3レベルの内、一番下のクラスに振り分けられた学生である。

## 手順

上の調査協力者に対して、自尊感情尺度(4件法)、選択式質問項目(4件法)、さらに自由記述式の質問を含むアンケート(Appendix参照)を実施した。自尊感情尺度は、多くの研究で使用されており、質問紙の限られたスペースに収まるRosenbergの尺度を使用した。この尺度は多くの言語に翻訳され、調査に使用されている。一例を挙げると、Shin(1994)が、韓国語訳を調査に使用しており、その際の $\alpha$ 係数は.88であった。本調査ではRosenberg尺度の日本語訳(山本他、1982)を使用した。この日本語版は多く利用され、信頼性、妥当性ともに十分とされている(山田・岡本、2006; 溝上、2010; 岡田、2007)。尺度項目は以下の通りである。

1. 少なくとも人並みには、価値のある人間である。
2. 色々な良い素質をもっている。
3. 敗北者だと思ふことがある。(逆)
4. 物事を人並みには、うまくやれる。
5. 自分には、自慢できるところがあまりない。(逆)
6. 自分に対して肯定的である。

7. だいたいにおいて、自分に満足している。
  8. もっと自分自身を尊敬できるようになりたい。(逆)
  9. 自分は全くだめな人間だと思ふことがある。(逆)
  10. 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思ふ。(逆)
- (逆)は逆転項目

『「ヤル気」をなくした原因は何ですか?』という質問に自由記述で回答してもらった。「中学や高校の英語授業中に『ヤル気がなくなった』と感じたことはありますか。」という質問で「ほとんど毎回感じた」、「少しあった」と回答した288名中、274名を分析の対象とした。上の自由記述回答については、テキストマイニングソフト(SPSS Text Analysis for Surveys 3.0)を使用してキーワードを抽出した。IT用語辞典e-Words(テキストマイニング、2006)によると、テキストマイニングは、「定型化されていない文章の集まりを自然言語解析の手法を使って単語やフレーズに分割し、それらの出現頻度や相関関係を分析して有用な情報を抽出する手法やシステム」と定義されている。この分析の特徴は、選択式の質問項目では拾い切れない学習者の声を引き出し、分析結果を可視化することでキーワードと学習者の属性との関連を探ることが可能な点にある。自由記述式の質問には想定外の回答が得られるというメリットがある一方、読むのに時間がかかり、また回答を読みながら分類・整理する場合、研究者の規準が安定しないという問題が生じる。テキストマイニングソフトは、これらのデメリットを解消してくれるばかりか、結果を2値データに変換し、それらに対応分析にかけることによって布置図を得ることができる。数値だけでは分からない要因間や属性との関係も、図から容易に窺い知ることができる。したがって、本調査では自由記述回答のテキストマイニングソフトによる分析と対応分析によるデータの可視化を主軸にしている。なお対応分析にはEXCEL数量化理論3.0(エスミ)を使用した。

自尊感情尺度以外の選択式質問項目(4件法)には以下を含めた。

1. 英語を学ぶこと(学校の内外で)は好きですか。
2. 中学や高校の英語授業中に「ヤル気がなくなった」と感じたことはありますか。
3. 授業外(たとえば自宅など)で自主的に英語を学習しようと思ったことはありますか。
4. 英語のテストに対して、心配をしたり「できれば避けたい」と思うことはありますか。
5. 英語のテストは簡単な方がいいと思いますか。



6. あなたは、自分のことを理解していると思いますか。
7. あなたは自分のことが好きですか。
8. 自分の現在の英語力をどのように評価しますか。
9. 大学生としての「現在の自分」をどのように評価しますか。

1と8については、Tsumura, (2010)で意欲喪失要因との関係を捉える上で重要な指標となった。2～7及び9は、学生の特徴を捉えるための探索的キーワードを考慮して作成した。

## 結果と考察

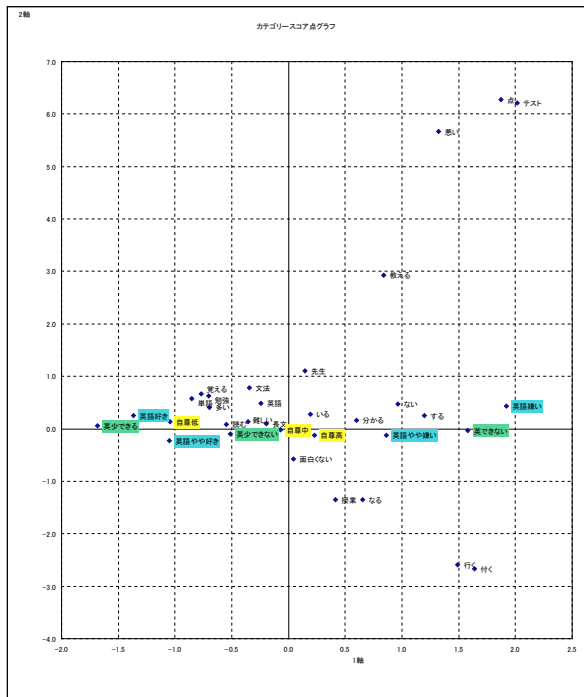


図. キーワードの布置図

テキストマイニングソフトが抽出したキーワードは、対応分析を行った際、頻度と共起関係を基に座標が決められ、その座標にしたがって布置図上に配置される。関連が強いキーワード群は集まり、関連が弱いものは離れた位置に現れる。また、選択式質問項目に対する回答も、図に投入することで、キーワード間の関連だけでなく、選択式項目間の関連も見ることが出来る。すべての回答を一度に布置図に投入すると要因間の関連が複雑になり図から何も読み取れなくなるので、一度に1、2項目ずつ投入して多数の図を作成する。図はその1つである。ここで、下位群と上位群の2群を図に投入しようすると、2群しかないためにキーワードが原点近くに集まってしまう、他の要因との関連が分からなくなるため、上・下位群それぞれの特徴を図から読み取ることは行わない。

軸には始めから意味があるわけではなく、図上に布置したキーワード群と選択式質問項目に対する回答の配置から意味を解釈することになる。選択式質問項目の回答を1つずつ図に投入していくと、図中の網掛けがあるキーワード(たとえば「英語の学習は好きですか」に対する回答、「英語好き」、「英語やや好き」、「英語やや嫌い」、「英語嫌い」)がX軸に沿って並ぶことがある。こういう場合は、X軸が、英語の好き・嫌いの程度を反映していると考えることができる。同様に、「現在の英語力を評価してください」に対する回答は左から、「英少できる(英語が少しできる)」、「英少できない(英語があまりできない)」、「英できない(英語ができない)」の順で並んでいるので、X軸が英語の好き・嫌いの程度だけでなく英語力の自己評価も反映していると言える。ただし、「英語がよくできる」という選択肢もあったが、これを選択した学生は2人しかいなかった。この回答を図に含めると図が横に長くなり見辛くなるため省いている。これらの選択式質問項目の回答の配置から「英語ができない」と自己評価している学生の多くが英語学習を嫌い、一方、「英語が少しはできる」と自己評価している学生の多くが英語学習を好むことが分かる。ただし、この図だけでは因果関係を読み取ることはできない。「好きだからできる」のか、逆に「できるから好き」なのか、また「嫌いだからできない」のか「できないから嫌い」なのかは分からない。

キーワードと選択式質問項目に対する回答の配置からは、以下のようなことが読み取れる。キーワードが図の右側に寄っていれば、英語が「嫌い」・「できない」と思っている学生の中にその傾向が強いと考えられる。したがって、「テスト」、「点」、「悪い」はいずれもこの学生の中に多く、原文から「テストの点が悪い」ことが彼らにとって意欲喪失の大きな要因であることが分かる。また、「付く」、「行く」が右下にあり、原点からこの二つを結ぶ線上に「授業」、「なる」があり、4つの関連が伺える。原文を見ると「授業に付いて行けなくなる」という意味の回答が彼らに多いことが分かる。

キーワードの1つ、「分かる」は今回の調査では例外なく「ない」と共起し、「分からない」を意味していることが原文により確認できる。「分かる」はやや右寄りに位置していたため、「嫌い・できない」と思っている学生の中にその傾向がより強く出たとと言える。「分からないために意欲喪失を起した」という内容の回答は全部で74件見られ、そのうち53件(71.6%)が下位群の回答であった。

選択式質問項目同士の関係では、次のような特徴が出ていた(図は省略)。「『ヤル気がなくなった』と感じたことはありますか」に対する回答を投入すると、「ない」という回答が極端に左に寄る。これは、意欲喪失要因の布置図に投入しているので当然である。意欲喪失を経験していない学生のほとんどが、英語を「好き・できる」と考えていることが分かる。次に、「自主的に英語を学習しようと思ったことはありますか」に対する回答を見ると、「ある」が左端に、「ない」が右端にきていた。当然ながら、英語が「好き・できる」と考えている学生は自主的に学習することに抵抗を感じていないのに対して、英語が「嫌い・できない」と思っている学生はほとんど自主学習をしたがらないことが分かる。「英語のテストに対して、心配をしたり『できれば避けたい』と思うことはありますか」と「英語のテストは簡単な方がいいと思いますか」に対する回答を投入すると「ある」と「思う」という回答が右端に寄り、「ない」と「思わない」が左に布置する。「嫌い・できない」と思っている学生の多くがテストに不安を感じ、簡単な問題を望んでいるようである。「自分のことを理解していると思いますか」の回答「思う」は左端に、「思わない」は右側に布置した。「あなたは自分のことが好きですか」の回答「好き」は原点近くに布置し、「嫌い」は右端に布置した。英語が「嫌い・できない」と言う学生の多くが自分のことを理解していないと感じ、自分を嫌いだと思っていることが分かった。「大学生としての『現在の自分』をどのように評価しますか」に対しては、「良い学生だと思う」が左の方に、「悪い学生だと思う」が右端にきていた。「嫌い・できない」と言う学生の多くは、自分のことを悪い学生だと感じているようである。

自尊感情については、Rosenbergの尺度得点を合計し、平均値をとり、平均値±1標準偏差を《中》群とし、それより上を《高》群、下を《低》群として、図に投入したが、仮説と反する結果となった。図で見る限り自尊感情《高》群が「嫌い・できない」と言う学生の側にわずかに寄っており、《中》群はほぼ原点の位置に、そして《低》群は「英語好き」、「英語少しできる」という回答に近く布置している。このことから、英語が「好き・できる」と考えている学生は自尊感情が低いと言えるだろうか。予想に反する結果であったため、原因について考察してみることにした。

まず考えられることは、尺度に問題があるという可能性である。そのように思える理由は、「あなたは自分のことが好きですか」、「大学生としての『現在の自分』をどのように評価しますか」という項目において、Rosenbergの尺度と

違って仮説通りの結果が出ているからである。この2項目は尺度には入っていないもののRosenberg(遠藤, 1992に引用)の定義から自尊感情に含まれると考えられる。だがこれについては、他の尺度を利用して同様の調査を行い、その結果を待たなければならない。また、日本語訳に問題があるという可能性も考えられる。同じRosenbergの尺度であっても別の日本語訳版を使用すれば結果に違いが生じたかもしれない。もう1つの問題点は「自尊感情は個々の評価の単純な加算モデルでは説明しきれない(p. 59)」と遠藤(1992)が指摘するように、本調査においても尺度得点の合計では自尊感情の高低がはっきり区別できなかったであろう。

そこで、Rosenberg尺度に下位尺度が存在することを確かめるために因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。結果はTable 1に示す。

表 1. 自尊感情尺度の因子分析結果

項目	I	II	III
何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う ▽	.861	-0.87	.067
自分は全くだめな人間だと思うことがある ▽	.824	.102	-.158
敗北者だと思うことがある ▽	.689	-0.06	-.168
自分には、自慢できるところがあまりない ▽	.447	-.102	.262
自分に対して肯定的である	-0.76	.814	-.171
だいたいにおいて、自分に満足している	.033	.684	-.023
色々な良い素質をもっている	.025	.204	.679
少なくとも人並みには、価値のある人間である	.005	.209	.626
もっと自分自身を尊敬できるようにになりたい ▽	.184	.239	-.480
物事を人並みには、うまくやれる	.157	-.017	.463
因子間相関	I	II	III
	I	-.542	.506
	II	-	.644
	III		-

▽ = 逆転項目

内の整合性を見る $\alpha$ 係数は.784であった。非常に単純構造に近いかたちで、3因子が抽出できたように見えるが、先行研究で3因子構造のものは見られない。第1因子の項目がすべて逆転項目であることから、日本語訳の表現に何か項目をまとめる要因があるようにも思えるが、因子の解釈が困難であったため、下位尺度として分析に利用することは断念せざるを得ない。



そこで分析方法を変更し、「分からなかったために意欲喪失が起こった」という内容の回答をした学生(74名)について詳しく見ることにした。つまり、彼らの中だけでRosenberg尺度のそれぞれの項目がどのように回答されているか、またその他の選択式質問項目の回答がどのような特徴を示すかを調べた。これらの項目はすべて4件法であったが、回答を二つ(Yes/No)にまとめた比率の差を検定した。その結果をTable 2に示す。

表 2. 各項目内における比率の差の検定結果

項目	Yes	No	欠損値	カイニ乗値	p
少なくとも人並みには、価値のある人間である	51	17	6	16.254 **	.000
敗北者だと思ふことがある (逆)	43	26	5	4.765 *	.029
物事を人並みには、うまくやれる	44	24	6	5.882 *	.015
自分には、自慢できるところがあまりない (逆)	45	22	7	7.896 *	.005
もっと自分自身を尊敬できるようにになりたい (逆)	51	17	6	17.000 **	.000
自分は全くだめな人間だと思ふことがある (逆)	42	25	7	4.313 *	.038
自分の現在の英語力をどのように評価しますか (できない)	12	60	2	32.000 **	.000
あなたは、自分のことを理解していると思いますか	50	22	2	10.889 **	.001
英語のテストに対して、心配をしたり「できれば避けたい」と思ふことがありますか	60	13	1	30.260 **	.000
英語のテストは簡単な方がいいと思いますか	59	14	1	27.740 **	.000
下位群・上位群	53	21	0	13.838 **	.000

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$  自由度 1

比率の差を検定した結果、Rosenberg尺度のうち6項目で有意な差が見られ、この表から「分からなかったために意欲喪失が起こった」と感じている学生には、下位の者、英語ができないと思っている者が多いこと、「少なくとも人並みに価値のある人間である」、「物事を人並みには、うまくやれる」と考えている者が多いことが分かる。一方、「自慢できるところがあまりない」、「もっと自分自身を尊敬できるようにになりたい」、「敗北者だ」、「全くだめな人間だ」と考えている者が少ないことが分かる。つまり、Rosenberg尺度で測定できる自尊感情は、下位の学生、英語ができないと感じている学生についても必ずしも低くないと言うことができる。自尊感情尺度以外の項目で特筆すべき点は、テストについて不安を感じている学生、簡単なテストを望んでいる学生が多い点である。なお、Rosenberg尺度に対する回答で欠損値が比較的多いのは、「答えたくない質問には答えなくてもよい」と指示したことによるものと推測される。

仮説と反対の結果になった原因は、先に挙げた尺度やその日本語の問題以外に、リサーチデザインにあったことは認めなければならない。つまり、日常生活のあらゆる側面で浮き沈みする自尊感情を、英語の好き・嫌い、でき

る・できないのみで見ようとしたことに無理があったと考えられる。たとえば今回の下位群の学生の中にはスポーツが得意な学生が多かったと聞いているが、スポーツを通して高い自尊感情を獲得した学生がいてもまったく不思議ではない。たまたま英語が苦手であるというだけで、彼らの自尊感情が低いとは限らないわけである。

当然、下位群や英語が嫌い・できないという学生の中にも自尊感情の高い学生もいれば低い学生もいるであろう。自尊感情が高いからヤル気があるわけではなく、また低いからといってヤル気がないわけではない。むしろ、彼らにとっては自尊感情が傷つけられることに対する不安が、学習行動に影響を及ぼしているのではないかと。自尊感情を防衛しようとする意識が強い動機づけとなることは、Covington(1992)に説明がある。ならば自尊感情防衛の意識は意欲喪失と関連があっても不思議ではない。したがって、積極的に学習しようとしなないのは、彼らなりの防衛メカニズムと考えられる。

逆に、英語が好き・できると考えている学生の中に自尊感情《低》群が多かったのは、もちろん「自尊感情が低い学生の方が英語ができる」というわけではない。これは、彼らが自尊感情が傷つくことをそれほど恐れていないことを示しているものと考えられる。コミュニケーション能力を獲得する過程は失敗の連続である。だが、そうした失敗から学ぶことも多いはずである。失敗を恐れて何も行わなければ進歩が望めないのも理にかなっている。したがって、失敗によって自尊感情が傷つくことを恐れない学習者は、結果的に語学学習に向いているのかもしれない。

## 課題

上で考察したことはまだ推測の域を出ない。これまでは意欲喪失に直接つながる要因だけを問題にしてきたが、自尊感情防衛が大きな影響力を持っていることを検証するためには、「原因帰属」についても考慮しなければならない。たとえば、テストで良い点が取れなくて、同時に意欲が低下している学生がいたとして、その原因を探ろうとする場合、テストの点数が直接意欲喪失につながると捉えるのは早急と言えよう。もし彼が「良い点が取れなかった原因は自分の能力不足にある」と感じた場合、意欲喪失と自尊感情の低下が起こる。これに対して、「今回はあまり努力しなかった」と自分を納得させた場合は意欲喪失が起こりにくく、また自尊感情も防衛されることになる。同じようなことが学生の試験中の態度にも観察される。難しいテストになると適当に回答を終えて寝てしまう学生が多く、最後まで起きている学生の方が少ないなどということが見受けられる。「どうしてこんなにヤル気がないのだろう」とつい学生を責めたいことがあるかもしれない。しかし、これは彼らなりの自尊感情の防衛法と考えることはできないだろうか。「能力不足のため

にテスト成績が悪い」と認めるのは勇気が要る。一方、「途中でやる気をなくして諦めたせいで悪い点になる」と捉えた場合自尊感情は傷つかない。やはり、自尊感情を守ることは学生にとって非常に重要なのではないか。そう考えると、学生にそれほどの思いをさせている我々教員や大学側の配慮が欠けていると思えてならない。このように自尊感情を守ろうという意識が学習者の行動に影響を与える例は少なくないと思われる。だから学習者の自尊感情の変化にもう少し目を向けた授業・カリキュラムの改善は、筆者にとっても、また大学教育にとっても大きな課題であると思う。

もし、英語を学習した結果、自尊感情が低下するというようなことが起こるなら、そもそも英語を学習する意味があるだろうか。筆者には本末転倒に思える。ドルニエイ(2005)は、「生活が活力と決意を持って学習に集中できるためには、健康的な自尊心を備え、学習者としての自己を信じる必要がある…」(p. 102)と提言している。まず、健全な自尊感情を育み、自分に自信を持ち前向きに問題解決ができる人物を輩出することこそ、大学教育の主たる目的ではないだろうか。学習者としての自律・自立を促すことを軸に教育が行われていなければならないと思う。

こう考えると、多くの大学で開講されている「資格試験対策」的な授業は大学教育の目的から逸脱しているように感じる。ドルニエイ(2005)も最近の教育について次のように憂いている。「決まった範囲を終わらせ、テストや受験に通用する力をつけさせなければならないというプレッシャーが増す中で、教師の注目点は必然的に、過程、つまり学習者がどのくらい意欲的に取り組み楽しんでいるか、ということから、結果、つまり早く目に見える成果を出すことに移って行った」(p. 85)。就職超氷河期と言われる中、学生が有利に就職できるように配慮することは大学側にとっては必要な対応である。また、学生の側でも、履歴書の資格欄に書ける項目を1つでも多く欲しいと考えるのも無理はない。双方の思惑が合致して、「テストで点を取る」ための講座が開講されている。しかし、特定のスコア取得を目的として受験勉強を行うことは、語学の学習としては虚しい。コミュニケーションの喜びを味わうことのない、記憶に頼るばかりの学習は英語を好きにさせるところか、学習意欲を喪失させることになるだろう。特に、下位群や英語が嫌い・できないと考える学生にとっては、伸び悩むスコアがどれほど彼らの自尊感情を傷つけているだろうか。150点上がったと思って喜んでいたら、次に受けた時にまた150点下がっていたというようなテストなら彼らの落胆がいかに大きいか想像に難くない。単なる数字に踊らされているのは学習者だけではない。教員や大学側も理解が欠けているのではないか。スコアが抽象的なものでしかないことを認識している教職員はどれほどいるだろうか。スコアによって何ができるようになったかが具体的に示せないようなものは到達目標とすべきではない。学生には、具体的な目標を提示し、教員はその達成に向けて支援し、学生に「～

ができるようになった」という具体的な達成感を与え続けなければならない。これによって学習者は健全な自尊感情を獲得し、新たな学習に挑むことができるはずである。学習者の意欲喪失を未然に防ぎ、またやる気を失ってしまった学生をもう一度英語学習に引き戻すことが、英語嫌い・英語離れが増えた今日の大学にとって最重要課題であると思う。

## 結び

本稿は、意欲喪失と自尊感情の関係探索を目的として、首都圏と関西の4年制大学4校に所属する414名の学生を対象に質問紙による調査を行った結果を報告するものである。質問紙には、自尊感情尺度、選択式質問項目の他、自由記述式項目も含め、自由記述式項目に対する回答は、テキストマイニングソフトで分析を行い、意欲喪失要因を示すキーワードを抽出した。布置図上には、選択式質問項目の回答も布置され、キーワードとの関連が探索された。特に「分かる」というキーワードは、「分からなかったために意欲喪失が起こった」を意味し、そう回答した学生(74名)については、選択式質問項目に対する回答の比率を検定した。その結果、予想に反して、下位群の自尊感情は必ずしも低くはなく、また、上位群の自尊感情が比較的低いという結果となった。これは、「英語ができるから自尊感情が高い」、また「できないから低い」という単純な関係があるわけではなく、自尊感情を防衛しようという意識が結果に影響したものと考察する。そのような意識が強い学習者の中には、傷つくことを恐れて積極的に学習に取り組まない者もいる。一方、コミュニケーション力を向上させる過程で自尊感情が傷つくことをそれほど恐れない者もいる。いずれにしても学習者の行動に自尊感情防衛が何らかの影響を及ぼしていると推測され、意欲喪失に関わる今後の調査の一方向が示されたと考えられる。

ただし、調査実施上改善すべき点が3点あった。第1に、データ数の不満を挙げなければならない。今回の協力者数でもテキストマイニング分析によるキーワード抽出は行えたが、記述式質問項目では無回答も多いことを想定しておかなければならない。また、特定のキーワードについてどのような回答者の特徴があるのかを調べると視野に入れると400件余りのデータでは不十分である。今回は「分かる」というキーワードについてのみ分析を行ったが、他のキーワードについては回答数が不十分であったため、その分析は将来の研究に譲ることとした。第2に、調査協力者の選択は無作為ではなく、男子学生が圧倒的に多かった。さらに、上位・下位群の分け方についても研究者の判断で行ったため、結果を一般化することはできない。最後に、英語の好き・嫌い、できる・できない、上位・下位で自尊感情の高低を比べようとしたリサーチデザイン上の問題もあった。意欲喪失と自尊感情の変化を捉えるために

は今回のような一時的なデータの収集・分析ではなく、通時的な調査も必要となろう。だが、十分な協力者を確保し、デザインを修正すれば、テキストマイニングと対応分析の組合せは、自由記述回答から様々な要因間の関連を探索するのに適しており、特に学習者の心理の探求には威力を発揮すると考える。

今回は、先行研究から導いた仮説が支持されなかったが、この結果が逆に自尊感情防衛という要因を浮上させた。さらに原因帰属との複雑な関係が示唆されたことは、今後の筆者の授業実践に少なからず影響を与えてくれると思う。これまでは学習者の自尊感情を考慮することもなく、たとえばテスト実施後のフォローもただ単に「理解させる」ことに重点を置いていたが、失敗の原因を学習者の能力に帰属させないような工夫が必要であると感じた。このような配慮で英語嫌い・離れを少しでも減らすことができるのではないだろうか。授業の内外で、それをどのように実践して行くかが今後の課題となる。

## Bio data

**Shuji Tsumura** has been with Osaka University of Commerce since 2007. His primary research interests are e-Learning and Text-mining.

## 参考文献

- Covington, M. (1992). *Making the grade: A self-worth perspective on motivation and school reform*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dornyei, Z. (2001). *Teaching and researching motivation*. England: Pearson Education Limited.
- ドルニエイ・ゾルタン (2005)『動機づけを高める英語ストラテジー35』 米山朝二・関昭典(訳) 大修館書店
- 遠藤由美(1992)「個性化された評価基準からの自尊感情再考」藤藤辰雄・井上祥治・蘭千壽(編)『セルフ・エスティームの心理学』(pp.57-70) ナカニシヤ出版
- Heyde, A. (1979). *The relationship between self-esteem and the oral production of a second language*. Unpublished doctoral dissertation, University of Michigan.
- 柏木恵子 (1983)『こどもの自己の発達』東京大学出版会
- 溝上菜摘(2010)「児童期の家族関係と両親イメージが現在の自尊感情に与える影響」『佛教学大学院紀要 教育学研究科篇 第38号』91-106

Muhonen, J. (2004). *Second language demotivation: Factors that discourage pupils from learning the English language*. Retrieved from <https://jyx.jyu.fi/dspace/bitstream/handle/123456789/7348/G0000639.pdf>

岡田努(2007)「現代青年の友人関係と自己像・親友像についての発達の研究」『金沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇 27』17-34

Rubio, F. (2007). Self-esteem and foreign language learning: An introduction. In F. Rubio (Ed.), *Self-esteem and foreign language learning*. Newcastle, UK: Cambridge Scholars Publishing.

Sim, H. O. (1994). *Coping resources mediating the relationship between stressful life events and delinquent behavior among adolescents*. Unpublished Doctoral Dissertation, Oregon State University.

テキストマイニング(2006) In IT用語辞典 e-Words. Retrieved from <http://e-words.jp/>

Trang, T. T. R., & Baldauf, R. B. (2007). Demotivation: Understanding resistance to English language learning: The case of Vietnamese students. *The Journal of Asia TEFL*, 4(1), 79-105.

Tsumura, S. (2010). A qualitative study on demotivating factors. In A. M. Stoke (Ed.), *JALT 2009 Conference Proceedings*. Tokyo: JALT.

津村 修志(2010)「英語学習意欲喪失の要因と英語の好き・嫌いとの関係」『大阪商業大学論集 第5巻第5号(通算156号)』27-42.

Ushioda, E. (1998). Effective motivational thinking: A cognitive theoretical approach to the study of language learning motivation. In A. Alcón & V. Codina (Eds.), *Current issues in English language methodology* (pp.77-89).

山田みき・岡本祐子(2006)「現代青年の自己受容—自己による自己受容と他者を通しての自己受容の観点から—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第3部55号』339-348

山本真理子・松井豊・山成由紀子(1982)「自尊感情尺度」山本真理子(編)『心理測定尺度集1—人間の内面を探る(自己・個人内過程)』(pp. 26-43) サイエンス社





## Appendix I

### 英語授業についてのアンケート

この調査は、英語の授業改善を目的として行っています。成績には一切影響しません。ご協力、どうぞよろしくお願いいたします。

1. 英語を学ぶこと(学校の内外で)は好きですか。

1	2	3	4
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<span style="margin-right: 20px;">「好き」</span> <span style="margin-right: 20px;">「どちらかというとき好き」</span> <span style="margin-right: 20px;">「どちらかというとき嫌い」</span> <span>「嫌い」</span>			

2. 上の質問で①、②の人にお尋ねします。下の  に入るように理由をお答えください。(複数回答可)

英語は

好きです。

{  
なので  
だから}

3. 上の質問で③、④の人にお尋ねします。下の  に入るように理由をお答えください。(複数回答可)

英語は

嫌いです。

{  
なので  
だから}

4. 「英語を学習してもいい」と感じるのはどのようなときですか。(複数回答可)

5. 中学や高校の英語授業中に「やる気がなくなった」と感じたことはありませんか。

1	2	3	4
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<span style="margin-right: 20px;">「やる気がなくなったことはない」</span> <span style="margin-right: 20px;">「あまりない」</span> <span style="margin-right: 20px;">「少しあった」</span> <span>「ほとんど毎回感じた」</span>			

6. 質問5で③、④の人にお尋ねします。「やる気」をなくした原因は何ですか。(複数回答可)

7. 将来の英語授業において、どのようなことがあると「やる気」がなくなると思われますか。

8. 授業外(たとえば自宅など)で自主的に英語を学習しようと思ったことはありますか。

1	2	3	4
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<span style="margin-right: 20px;">「ある」</span> <span style="margin-right: 20px;">「少しある」</span> <span style="margin-right: 20px;">「あまりない」</span> <span>「全然ない」</span>			

9. 英語のテストに対して、心配をしたり「できれば避けたい」と思うことはありますか。

1	2	3	4
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
<span style="margin-right: 20px;">「ある」</span> <span style="margin-right: 20px;">「少しある」</span> <span style="margin-right: 20px;">「あまりない」</span> <span>「全然ない」</span>			



1 0. 英語のテストは簡単な方がいいと思いますか。

1	2	3	4
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
└──────────┬──────────┬──────────┬──────────┘			
「思う」	「少し思う」	「あまり思わない」	「全然思わない」

1 1. あなたは、自分のことを理解していると思いますか。

1	2	3	4
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
└──────────┬──────────┬──────────┬──────────┘			
「思う」	「少し思う」	「あまり思わない」	「全然思わない」

1 2. あなたは自分のことが好きですか。

1	2	3	4
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
└──────────┬──────────┬──────────┬──────────┘			
「好き」	「どちらかというと好き」	「どちらかというと嫌い」	「嫌い」

1 3. 次の項目について、あなたが、あなた自身をどのように思っているかを、ありのままに答えてください。

	よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
(1) 少なくとも人並みには、価値のある人間である。				
(2) 色々な良い素質をもっている。				
(3) 敗北者だと思うことがある。				
(4) 物事を人並みには、うまくやれる。				
(5) 自分には、自慢できるところがあまりない。				
(6) 自分に対して肯定的である。				
(7) だいたいにおいて、自分に満足している。				
(8) もっと自分自身を尊敬できるようになりたい。				
(9) 自分は全くだめな人間だと思うことがある。				
(10) 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う。				

(1 4) 自分の現在の英語力をどのように評価しますか。

1	2	3	4
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
└──────────┬──────────┬──────────┬──────────┘			
「よくなる」	「少しはできる」	「あまりできない」	「まったくできない」

(1 5) 大学生としての「現在の自分」をどのように評価しますか。

1	2	3	4
<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
└──────────┬──────────┬──────────┬──────────┘			
「良い学生」	「どちらかというと良い学生」	「どちらかというと悪い学生」	「悪い学生」

ありがとうございました。

